

エルサルバドルの考古遺産を見てみませんか。

エルサルバドル共和国は、メキシコの南東、グアテマラに隣接する四国と淡路島を合わせたほどの中米で最も小さい国。300キロメートルを超える海岸線、最長で最大の流量を誇るレンパ川、国土の北側と南側で、東西方向に連なる2000メートル級の二筋の山脈、その間に広がる平野といった地形的特徴から熱帯圏にありながら自然環境は多様であり、そうした中で先スペイン時代から現在までヒトの活動が連綿と続いている。



写真 1. サンサルバドル山から見た 2018 年の初日の出

その小さく自然に恵まれた当地には、なんと 700 以上の遺跡が登録されており、先スペイン時代のピラミッド神殿を中核とする都市遺跡、村落址、畑地、墓地、16 世紀のカトリック教会址、植民地時代や近代の天然藍抽出工房跡など様々である。19 世紀後半に機能していたサンフランシスコ・パナマ間の国伝いの航路を人や物資を運んで行き来していた蒸気船が、太平洋岸の海中に何隻も沈んでいる。



写真 2. タスマル遺跡建造物全景

首都サンサルバドルから北西へ 75 キロメートルのところにあるチャルチュアパ遺跡群のひとつタスマル遺跡は、高さ 20 メートルにもなるピラミッド神殿を中心とした複合建造物である(写真2)。

20 世紀の半ばに発掘調査および修復・保存作業、公園化が米国人考古学者スタンレー・ボッグスにより行われ、エルサルバドルにおける文化遺産の象徴となっている。2001 年にドル化政策が実施されるまで、自

国通貨のひとつ100コロン札の図柄に使用されていたことからその重要さが伺える。

青年海外協力隊隊員とともに2003年11月頃からしぶしぶ仕事をはじめたが、測量作業を続けていく中、建造物の配置から大ピラミッド内部に古い神殿が埋もれているのではないかとという仮説に辿りついた。これを証明すべく、日本人研究者とともにタスマル遺跡で建造物の発掘調査を計画し、調査は2004年4月から始まった。



写真3. 主神殿への階段

8年に亘る調査の結果、紀元4世紀後半頃に最初のピラミッド神殿が建設され、16世紀初頭までに少なくとも16回の増改築が行われたようである。それらのなかで、「列柱の建物」と呼ばれる、古い時期の建築に伴う主神殿への階段とその両袖の壁を発掘し、仮説を立証することができた(写真3)。発掘された階段は幅3.6メートル、泥漆喰で仕上げられていた。その一部が壊れていたため下方へと掘り続け、階段から4mほど下で生贄と見られる人骨と供物が出土した。

刷毛で掃除し埋葬の全体を出す。堅坑内の高温多湿の条件下では脆くなった人骨の強化をすることができない。埋葬の周囲をガーゼと石膏で固めて丸ごと取り出し、タスマル遺跡公園に近いカサブランカ遺跡公園にある研究棟へ運んだ(写真3)。

人骨の置かれた研究室の作業台ではその晩、人骨の周囲に3本の蠟燭を立てて読経し、死者への弔いを行い、その部屋で就寝したことを思い出す。霊を鎮めるため蠟燭の火は朝まで灯したままにしておいた。

翌日から作業を始める。ヒスイ製の玉や管玉、ペンダントが見つかり、その数は83点に上った(写真4)。また、石でできた円盤型装飾品、被り物をした人物を彫りこんだ骨製品、食肉獣の骨も現れた。一方、階段下の堅坑内では、さらなる発掘が行われた。その結果、主神殿と「列柱の建物」を建設するにあたり、日干し煉瓦



写真3. 階段下で見つかった埋葬

で箱をつくりその中に埋葬人骨が置かれ、副葬品が供えられていたことがわかった。また、日本での理化学分析により、埋葬はゴザで覆われていたことも明らかになった。いったいどういう人物が埋葬されていたのか？ヒスイ製首飾りの素晴らしさから、当時の社会における高位の人物であろうと想像される。しかし、首長のような最高位の人物としては副葬品が少なすぎる。



写真4. ヒスイ製装身具
(埋葬への副葬品)

ひょっとすると主神殿の下には王墓が埋まっているかもしれない。その続きはエルサルバドルに来て、想像をふくらましてほしい。

柴田潮音

柴田 潮音(しばた しおね)氏

1995年にプロジェクトチャルチュアパの先鋒として現地に入り、エルサルバドル文化庁や関係諸機関との渉外に携わる。1997年から3年間、日本政府文部省科学研究費補助金による、京都外国語大学を調査主体としたエルサルバドル総合学術調査に参加。現在はエルサルバドル文化省文化自然遺産局考古課の研究者として、調査、文化遺産の保護等に従事。